平家物語内裏炎上の深層

——日吉神火と熒惑入太微——

谷口廣之

はじめに

平家物語の生成について論じる方法のなかで、最も有力な手続きのひとつが伝承論的な視座であろう。大きくは平家物語そのものの発生、成立の契機、および基盤などを伝承の営みのなかに求めるといったマクロなものから、小さくは、あるいは個別には平家物語の素材のよってきたるところを探るミクロなものまで、さまざまな角度からその可能性が追求されてきたし、現在もそうである。そしてその多くは手続きとして民俗学的な、あるいは宗教民俗学的仏教民俗学的な方法に依拠していると考えられる。そこで重視されるのは、在地の伝承、説話の管理者・管理圏、伝播者・担い手としての唱導の聖たち、彼らによって形成される説話の場、などの視点であろう。その有効性はそれとして、我々が意識的無意識的に遠ざけてきた都市という視点が存在するのではないだろうか。平家物語の生成を一回的な個性の営み、いわゆる作者論から解放して、広く伝承世界の営みのなかにそのダイナミズムを求めていこうとする方向は、いきおいその視野から遠ざけられてしまうある側面を生じさせたのではないだろうか。

平安建都以来四百年、平安京の都市としての成熟は、換言すれば伝承空間としての都市がその裡にさまざまな記憶としての伝承を奥深く蓄積し重層化していく過程でもあったろう。誤解を恐れずにいえば、平家物語の「舞台」はそのような都と在地との緊張関係において成り立っている。在地は陸続と新しい力を生み出し、ひたひたとその力が都を犯しはじめる。一方その都に踏みとどまることができなくなった平家は遂にそこから追われるように脱落していく。その過程では在地に新たな伝承が胚胎し、都にはさらなる伝承が層を

重ねていく。その意味で平家一門の栄光と滅亡は、一方では多様な伝承を在地に種播きつつ、他方都市の伝承に新たな頁を加えていったという両面を併せもっているといえるのではないだろうか。

そこで本稿では、平家物語の都市の伝承としての一面を「内裏炎上」を手掛りに採ってみたい。①

1

安元三年四月廿八日深更、樋口富小路を火元とする火災は折からの辰巳の風にあおられて京中を瞬く間に炎で呑みこんだ。しかも大内裏に吹きつけ大極殿をはじめとして諸門諸殿を灰燼に帰した大火災であった。

平家物語の内裏炎上はこの大火を描く章段である。今覚一本に従ってこの内裏炎上の段をA～Fの構成要素に分かって分析を加えてみることにする。

A　火災の発生と延焼

同四月廿八日亥剋斗、樋口富小路より火出来て、辰巳の風はげしう吹きければ、京中おほく焼にけり。大なる車輪の如くなるほむらが、三町五町をへだてて戌亥のかたへすぢかへに、とびこえ〳〵やけゆけば、おそろしなどもおろかなり。

B　名所・邸宅の焼失

或は具平親王の千種殿、或は北野の天神の紅梅殿、橘逸成のはひ松殿、鬼殿・高松殿・鴨居殿・東三条、冬嗣のおとゞの閑院殿、昭宣公の堀川殿、是を始て、昔今の名所卅餘箇所、公卿の家だにも十六箇所まで焼にけり。其外、殿上人諸大夫の家々はしるすに及ばず。

C　内裏の炎上

はては大内にふきつけて、朱雀門より始て、応天門・会昌門、大極殿・豊楽院、諸司八省・朝所、一時が内に灰燼の地となりにける。家々の日記、代々の文書、七珍万宝さながら塵灰となりぬ。其間の費へいか斗ぞ。人の焼けしぬる事数百人、牛馬のたぐひは数を知らず。

D　山王の祟り

是たゞ事に非ず、山王の御とがめとて、比叡山より大なる猿どもが二三千おりくだり、手ン々に松火をともひて京中をやくとぞ、人の夢にはみえたりける。

E　大極殿焼失の先例

大極殿は清和天皇の御宇、貞観十八年に始てやけたりければ、同十九年正月三日、陽成院の御即位は豊楽院にてぞありける。元慶元年四月九日、事始あッて、同二年十月八日にぞつくり出されたりける。後冷泉院の御宇、天喜五年二月廿六日、又やけ

にけり。治暦四年八月十四日、事始ありしかども、造り出されずして、後冷泉院崩御なりぬ。御三条の院の御宇、延久四年四月十五日作り出して、文人詩を奉り、伶人楽を奏して遷幸なし奉る。

F　末代意識の提示

今は世末になツて、国の力も衰へたれば、其後は逐につくられず。

（「内裏炎上」②）

このA～Fの構成は、例によって独自記事を有する盛衰記を除けば、日時設定・焼失順など細目の異同はあっても諸本間において基本的には共通している。

従来の研究史はこの内裏炎上の段を平家物語の文脈において把握することに重点を置いてきた。すなわち安元三年のこの大火という「歴史的事実」を、平家一門の興亡史のなかで平家物語がどのような事件として把えているのか、あるいは意味づけ位置づけているのか、という視点である。そこではA～Cは実際に起こった「事実」の世界であり、D～Fはその事実に対する物語の解釈の姿勢を示すものとして考えられてきたといえよう。

平家物語の作者はこの火事の原因が「山王権現のお咎」にあると見たのである。「諸行無常」ということを一つの重要主題

としたこの物語の作者が、むしろそのことには触れないで、これを比叡山王のお咎めとして受けとったのは何故であるか。つまり今まで語って来た山門の訴訟というものに結びつけようと意図したからであって、ここにもこの物語における叙述の統一性が見られるわけである。

（佐々木評講③）

語り物系はそれ（治承から寿永にかけての天変地異、火事、飈、地震など―引用者註）をこの物語の章段とするにふさわしいように、あるいは年月日をかえ、あるいはある事件の前兆、神仏のさとしという形にすること、すなわち虚構を加えて、『平家物語』の本筋に結びつけることをしている。（中略）『平家物語』においては、内裏が炎上したという点で、この事件は特に意味があるからなのである。王法衰微のきざしと見うるからなのであり、治承時代をあさましい末法濁世の一こまとして説こうとしているからである。

（冨倉全注釈④）

山王の怒りによって平安文化の粋を集めた数々の名所が焼失、果ては内裏が炎上するというところに末世的現実を確認するのがこの章段のテーマであり（後略）

（佐伯四部本評釈⑤）

などの諸説の示す通りである。もちろん、A～Cが事実の世界とはいっても、たとえばBにあたる名所焼失の記事が必ずしも事実に則るものではなく、そこに物語の一定の立場が看取できることも、佐伯氏を含めて既に指摘されている[6]が、内裏炎上の段の組み立てを事実と解釈という枠組みとして把える点では同じである。

そこで本稿ではさまざまな資料と平家物語との比較対照のなかから、内裏炎上の段の表層にはうかがうことのできない、物語の、そして安元三年大火にまつわる伝承の深層に垂鉛を降してみたい。

2

安元三年大火の様相を最も詳細に記録としてとどめているのは『清獬眼抄』[7]である。正確にいえば『清獬眼抄』に引用されている『後清録記』であるが、慣用に従って『清獬眼抄』としておく。『抄』はまず内裏の罹災状況を記し、次に「惣遭火灰公卿侍臣等」として関白以下十三家の公卿邸、侍臣、大夫、検非違使の邸を連ね「此外可然人家不遑毛挙」と結んでいる。しかも関白以下の諸邸について逐一詳しい注を施している。たとえば「関白殿御所」については「錦小路南。大宮東。此間御坐于松殿北政所御所也。火間有御出也。」とあって当夜松殿つまり基房が火を避けて邸を出たことが知られる。さらに『抄』はこの大火の罹災状況を図示し、どの範囲に火災が及んだかを地図をもって詳述している。『抄』の大火に対する姿勢としてここで確認しておきたいのは、

1　まず内裏の罹災状況が最初にとりあげられていること

2　次に当時の公卿等の邸宅焼失状況が細かに示されていること

の二点である。

次に『百錬抄』[8]の記事を検討してみる。

廿八日。亥刻火起レ自二樋口富小路一。火焔如レ飛。八省。大極殿。小安殿。青龍白虎樓。応天会昌朱雀門。大学寮。神祇官八神殿。真言院。民部省。式部省。南門。大膳職。勧学院等払レ地焼亡。大内免二其難一。此外公卿家十余家為二灰燼一。皇居閑院。依二近々一。主上駕二腰輿一。行二幸二正親町邦綱卿第一。凡東限二富小路東一。西限二朱雀西一。南限二樋口一。北限二二条一。凡百八十余町。此中人家不レ知幾万家一。希代火災也。近年連々有二火事、変異一。果而如レ此。

大極殿焼亡例

清和天皇　貞観十八年四月十日丁巳

後冷泉院　天喜六年二月廿六日丁卯（造畢之後。百八十年一。経二）

高倉院　治承元年四月廿八日（延久四年造畢之後。経二百二十年一。）

此後無二造営一

ここでも『清獬眼抄』と同様に内裏の焼亡と公卿邸の焼失が火災

のポイントとして押さえられているが、注意したいのは「希代火災也。近年連々有火事、変異」という箇所である。つまり、火事と変異は並列なのか同義なのか、もしくは変異の一部が火事なのか、あるいは変異の顕れが火事なのか、という両者の関係であるが、このことについては次節で取りあげることとする。『百錬抄』の記事のもう一つの要点は「大極殿焼亡例」を特記し、しかも「此後無造営」と記している点である。これは平家物語のE、Fに重なる点である。

『愚管抄』[9]の記事は極めて簡略である。

サテ又此年京中大焼亡ニテ。ソノ火大極殿ニ飛付テ焼ニケリ。コレニ依テ改元治承ト アリケリ。

ここではこの大火によって安元が治承に改元されたこと、つまり災異改元が指摘されているわけだが、大火そのものについては大極殿の焼失に言及するのみである。このことは逆にいえば、安元三年の大火によって大極殿が焼失したという把握ではなく、むしろ大極殿を焼失させた大火災が安元三年の大火であったという観点に『愚管抄』が立っていると考えることもできるだろう。九条摂関家の出で、兼実の弟にあたり、しかも王城鎮護の道場である比叡天台の座主であった慈円の立場からすれば、大極殿の焼失の有する重みが彼の歴史意識にずしりと感受されたのではないだろうか。

『方丈記』[10]も内裏や公卿邸の焼失に触れてはいるが、主としてその関心は自らの体験に基づいた火に追われる人々の恐怖と悲嘆を描き出すことに傾いている。

去安元三年四月廿八日カトヨ、風ハケシクフキテ、シツカナラサリシ夜、……トヲキ家ハ煙ニムセヒ、チカキアタリハヒタスラ焔ヲ、地ニフキツケタリ。……其中ノ人ウツシ心アラムヤ。或ハ煙ニムセヒテタウレフシ、或ハホノヲニマクレテタチマチニ死ヌ。或ハ身ヒトツカラウシテノカルヽモ、資材ヲ取出ルニヨヨハス。

おそらく「風ハケシクフキテ、シツカナラサリシ夜」とは、あの夜の情景を記憶のうちに蘇らせる長明にとってのキーワードなのであろう。狂乱する炎とその下で展開される修羅の巷の光景が彼の記憶のなかに鮮烈に灼きつけられていたに違いない。

最後に『玉葉』[11]について検討してみよう。兼実は刻々と入ってくる情報をリアルタイムに順次記しつつ、

焼亡所々

大極殿已下、八省院一切不レ残

（中略）

公卿家

（中略）

已上公卿十四人云々

と整理している点で、平家物語のCと重なるし、また翌廿九日の記事では「大極殿真言院八神殿等焼亡之例」を「頼業」に報告させ「貞観十八年」と「天喜六年」の例を記し、「已上大極殿炎上、例ニケ度歟」としめくくっている。この点でも平家物語のEと立場を同じくし、『百錬抄』の姿勢とも共通するものがある。

以上のような諸資料と平家物語との対照によって明らかなことは、いずれもこの大火の最大の眼目を大極殿の焼失においている点であろう。それほどにこの大火は大極殿が焼け落ちた火災として人々に記憶されたのに違いない。

ただ、『清獬眼抄』、『百錬抄』、『玉葉』などが当日罹災した貴族たちの邸宅にこだわっているのに対し、平家物語はBの箇所において「昔今の名所」の焼失に焦点を合わせている点が特徴的である。この名所について覚一本では「具平親王の千種殿」以下九ケ所を挙げるが、諸本間で最も数の少ないのが屋代本の五ケ所、逆に最も多いのが盛衰記の三十余ケ所でかなり異同がある。しかも、これらに取りあげられた名所のなかには、当日一部分が類焼したにとどまったものや、あるいは全く被害を受けていない邸宅も含まれており、このことのもつ意味については別途検討する余地がある。ともかく大極殿の焼失が最大の共通の関心事であったことは動かし難い事実であったと考えてよいであろう。

ところで安元三年の大火による内裏の炎上は、実のところ「内裏」そのものへは及んでいない。内裏と大内裏の区別は必ずしも分明ではないが、「宮域の朱雀門から内を外重、建礼門から内を中重、承明門から内を内重とよぶ説があり、外重までを内裏とする場合（『古事類苑』居処部）もあるが、中重から内を内裏とよぶのが普通である」[12]とすると、安元三年の大火で焼失したのは、宮域の公的な政務機関部であり、天皇の私的生活領域にその災は及んでいないことになる。[13]そのことは『清獬眼抄』以下の諸記録にも明らかであるが、内裏の焼亡と大極殿以下の諸殿の焼失とはどうも区別して意識されていたのではないかと思われる。以下に示すのは、陽明文庫蔵「宮城図」（重文）の巻末記事である。[14]

内裏焼亡年々

村上　天徳四年九月廿三日庚申夜
遷都以後始有此事百六十七年

圓融院　貞元々年五月十一日丑夜　経十七年
天元三年十一月廿二日丙子酉書　経五年—

一条院　同五年十一年乙巳夜　経三—
長保元年六月十七日乙丑夜　経十八—
同三年十一月十八日乙酉夜　経三—
寛弘二—十一月十五日乙未　経五—

三条院　長和三年二月九日乙丑夜　経十—
同四年十一月十七日癸亥　経二—十ケ月

後朱雀院　長暦三年六月十六日乙酉夜　経廿五—
長久三年十二月八日丁未夜

後冷泉院　永承二年十一月二日丙申夜　経七年
天喜六年二月廿六日丁卯夜　経十一—

白川院永保二年七月廿九日戊申巳時　是日大極殿中院同焼亡

已上十四ケ度

これら十四度の火災はいずれも内裏そのものの焼亡であって大極殿以下の八省院はその対象ではないことがわかる。ただし一度だけ内裏と大極殿とがともに焼け落ちたときがあり、それが後冷泉院在位中の天喜六年、すなわち康平元年二月に起こった火災であった。内裏の十四度に対し大極殿の焼失は安元三年を含めて三度と数の上では少ないが、もちろん数の多寡が問題ではない。そもそも大極殿は宮域においていかなる場所として機能していたのか、そしてそれが焼失することがどのような意味をもつのかが問われなくてはならない。

大極殿が担った役割は「天皇の即位、大嘗祭、元正朝賀、正月七日の宴、御斎会、射礼、政、告朔、相撲、例幣、考問などの定例の儀式のほか種々の臨時の儀式」[15]と幅広いが、それらのなかでも天皇の即位の場としての大極殿であることが重要なのではないだろうか。都が本来宮都であり、さらに皇都であることを本質とするものであるならば、都の秩序の本源は天皇の存在にあるはずである。

都は大きな宮殿であり、宮殿は小さな都である。共に構築（アーキテクチュア）物の集合であり、それらを繋ぐ回路の集積から成り立っている。それぞれに秩序と調和をもった小宇宙を形成している。それらは相互に変換しながら、同じ形をもった入れ子の箱のように、天皇の聖なる座を中心点として次第に幅を広げる同心円をなしている。[16]

その天皇が即位する儀礼空間としての大極殿の焼失は宮域の他の殿舎とは異なる重大な意味をもつことになるであろう。

即位の大礼は大内裏にある朝堂院正殿の大極殿において行なわれるのを基本とする。（中略）大極殿中央に据えられた高御座において即位の詔勅が発せられる。高御座は天照大神の座とも皇祖の座ともいわれる。[17]

そのようなものとしての大極殿が、この安元三年の大火以降再建されることがなかったことは、都の宮都としての秩序の源の喪失、都の変質をすら意味する大きな事件であった。実に高倉帝を最後にして大極殿での即位は跡を絶つことになるのであった。

平家物語はこの大極殿の焼亡を中心に据えながら安元三年の大火を内裏炎上として描くわけだが、実のところことはそれほど単純ではない。ここにはテクストと対象、あるいは素材、そして物語と歴史という大きな問題が横たわっている。

平家物語のように「歴史的事件」を「素材」として扱うテクストは、往々にしてテクストとその「歴史的事実」との距離が問題にさ

れる。そこから「虚構」とか「作為」といったテクストの営みが導かれがちである。しかし人間にとってあるがままの自然など論理的に存在しないのと同様に、テクストにとってあるがままの歴史などありようがないし、まして対象が自然ではなく人間の営みとしての歴史であればなおさらのことである。言い換えれば「事件」があったからテクストが成り立っているのではなく、テクストは一定のコードに従って「事件」を取捨選択し再構成しているのである。

内裏炎上に即していえば、鵜河・白山事件の展開の中で「突発的に〈全注釈〉」安元三年の大火が起こり、平家物語の立場から看過できない事件であったからこの大火を物語の中に取り込んでいった、という図式は、あくまで歴史から物語へという把握の仕方である。そうではなくて、内裏炎上はあくまで一連の「事件」の一環としてあり、むしろ「事件」と「事件」を再構成する媒介項として存在する。そこに働いているコードについて山下宏明氏は、

『平家物語』は〈人の夢〉を通して大火をとらえる。そのわけは、物語がそれまでに語って来た鵜河事件の処理の遅滞に対する〈あはれとく御裁可あるべきものを〉という思いを以て鵜河合戦以後の経過を受け止める説話的な理解によるもので、〈人の夢〉という不特定多数の人々の判断が物語の構想をも規定している。[18]

とととらえる。テクストの配列が継起的な「事件」の羅列ではなく、そこに一定の解釈のコードが看取されるとする点で妥当な指摘であろう。ただ氏のいう「説話的理解」と「不特定多数の人々の判断」とは同じものなのかどうか、異なるとすればどう違うのか、またそれらは「物語の構想」に無条件に媒介されていくものなのか、検討すべき余地を残しているだろう。

私見によれば、ここにはすぐれて都市の問題が介在する。内裏炎上、厳密にいえば大極殿の焼失という宮都としての都市の命運にかかわる事件であること、疫病、洪水、地震などとともに火災は単なる天災・人災ではなく都市的な災害であり、そこから都市固有の信仰や伝承が平安朝には蓄積されてきたことなどである。そのような視点から、以下二点について考察を加える。

3

平家物語はDの箇所において、この大火を山王の咎めとして把握するが、これと同じ発想に立つのが『歴代皇紀[19]』と『皇帝紀抄[20]』である。

大内裏焼亡事去十三日山王神輿被射無其沙汰訴付座主検非違使被召山僧仍偏山王所為之由京中風聞云々　（歴代皇紀）

元年四月廿八日夜。自朱雀門北至二于大極殿。小安殿。八省院及神祇官一焼失。火起二樋口富小路一。京中三分之一灰燼。世人称二日吉神火一。

（皇帝紀抄）

平家物語が「山王の御とがめとて……京中を焼くとぞ人の夢にはみえたりける」とするのに対応して、『皇紀』は「偏山王所為之由京中風聞云々」とし、『紀抄』も「世人称日吉神火」として、いずれも大火と日吉山王とを結びつけている。

平家物語の文脈に即せば、内裏炎上に前後して描かれるのは山門と院との対立を軸としたいわゆる白山事件であり、山門に対する院の処置が山王の咎めを誘いだし、大火災という事態を招来した、というように一応は文脈上の整合性を認めることはできる。それにしても平家物語が「人の夢」といい、『皇紀』が「京中風聞」といい、『紀抄』が「世人称」というのは偶然の一致であろうか。そこにはある一定の共通の認識と認識を共有する場が想定されるべきであろう。したがって平家物語が文脈上の整合性においてこの大火と山門との関わりを「構想」したという見方は妥当ではない。大火のよってきたるところを共通した記憶として了解すること、すなわち伝承するという営みとして、この大火を日吉神火としてとらえる都の眼、意識が働いているのではないだろうか。

そのことについて考えていく際に、もう一度『清獬眼抄』に立ち戻ってみる必要がある。この安元三年の大火からほぼ一年を経た治承二年四月廿四日、京中は再び大火災に呑みこまれた。安元三年大火が五条から内裏にかけての火災であったのに対し、この治承二年大火は七条から八条にかけての京域の南側の火災であったが、『抄』は次のように記す。

世人号二次郎焼亡一之。太郎ハ去年四月廿八日至二于大極殿一焼亡云々。

つまりこの治承二年の大火を人々は次郎焼亡と呼び、前年の大火を太郎焼亡の名で呼んだというのである。注目すべきは「世人号（ス）」という伝承性を帯びた主語が冠せられている点であろう。史家である井上満郎氏はこの太郎次郎の両焼亡について

ほぼ一年を経て二度も起った大火を、被災者の苦しみ、悲しみを嘗めた「世人」・庶民たちはそれに愛称をつけて呼んだ。いつまでも大火の被害に悲しんでばかりもいられない。日々の生活を再建していかねば、生き続けてゆけない。愛称を付すのも、大火を客観化するひとつの方法なのである。[21]

というが、このようなオプティミスティックな民衆史観には与しえない。モノに名を与えること、すなわち命名することは、言語によって世界を分節する行為である。見えざるもの、隠れた力を命名に

よって特定化し、そうすることによってはじめて人間はそれを認識したり祭ったり鎮めたり働きかけたりすることができるようになる。疫病や地震や火災は単なる天災ではない。それらを惹起こす見えざる力の発動を、「世人」は見たのである。

宮都の怨霊が朝廷とその宮都を覆そうとする。異常な大雨や旱天はもちろん、それと密接に関連する疫病や大火も天変地異であり、怨霊のもたらすものである。それが宮都を壊滅させる。[22]

だから安元三年と治承二年の大火をそれぞれ太郎焼亡・次郎焼亡と命名するのは、これらの火災を都にひそみ、あるいは都をおびやかす眼に見えぬ力の発現であるとする認識と表裏の関係において存在する行為なのである。

それにしてもなぜ太郎であり次郎なのか。多くの怨霊は固有名詞によって語られる。というより固有名詞を得ることによって怨霊はその正体を露わにし、祀られる対象となる。その意味では太郎次郎は一見したところ普通名詞性の域を出ていない。そのことを解く手掛りは盛衰記に求めることができる。例によって盛衰記はこの内裏炎上に関して他本にはない独自記事をいくつか有しているが、その中で次の「盲トの事」に注目したい。

大炊御門堀川に盲の、占ひする人道あり。占ひ言ふ言、時日を違へず。人皆、さすのみこと思へり。焼亡と訇りければ、この盲目、「何く候ぞ」と問ふ。「火元は樋口富小路とこそ聞く」と言ふ。盲、暫し打ち案じて、「戯呼、一定この火はこれ様に来るべき焼亡なり。ゆゆしき大焼亡かな。在地の人々も家々破り、儲け物どもしたため置べきぞ」と言ふ。聞く者、皆をかしと思ひて、「樋口は遙かの下、富小路は東の端、さしもやはあるべき。いかにと意得てかくは言ふぞ」と問ひければ、「占ひは推条口占とて、火口といへば焼え広がらん。富小路といへば、蔦は天狗の乗物なり。小路は歩きの道なり。天狗は愛宕山に住めば、天狗のしわざにて、巽の樋口より、乾の愛宕を指して、筋違さまに焼けぬと覚ゆ」とて、妻子引き具し、資財取り運びて逃げにけり。人鳴呼がましく思ひけれども、焼けて後にぞ思ひ合せける。[23]

ここでは安元三年の大火を天狗、しかも京の西北愛宕山に住む「天狗のしわざ」によるものとしている点に着目したい。なぜなら愛宕山に住むといわれる天狗は太郎坊という名を負う天狗であるからである。

世人皆いふ、京師にても愛宕、鞍馬、比叡いづれも天狗ありて、山上するに身をきよふせざれば、たたりをなす……国々の天狗それぞれの名あり、或は次郎坊、太郎坊、僧正坊[24]（後略）

弘治元年冬、比叡山、鞍馬、愛宕山鳴動シテ、希代不思義ノ

夭怪多ク……是レハ鞍馬ノ山ノ僧正坊、愛宕山ノ太郎坊、比叡山ノ次郎坊ガ時ヲ得テ出現ス[25]

この太郎坊についてはさまざまな伝承があるが、最も周知されているのはその前身を紀僧正真済とするものである。

柿本紀僧正（弾正大弼紀御園子名真済）ト聞エシハ、弘法大師ノ入室灌頂ノ弟子、瑜伽灌頂ノ補スル所、智徳秀一ニシテ験徳無双ノ聖タリキ、大法慢ヲ起シテ、日本第一ノ大天狗ト成リテ候ヒキ、此レヲ愛宕山ノ太郎坊ト申ス也[26]

太郎坊と申すは、文徳天皇の御時、洛陽の人正六位上紀の朝臣御国の子に、真済といふ人あり……いつの時なるぞや、真済染殿の后をみて心まどひ、思ひの火を胸にたき、遂に貞観二年二月に死せり、年六一、その霊魂大天狗となり、すなわちあたごの山の太郎坊これなり[27]

真済は惟仁惟喬の位争いにまつわる恵亮との験競べでも知られている。恵亮の「砕脳」によって惟仁が勝利し清和帝となるのであるが、真済が恋慕の炎を燃やした女性が他ならぬ清和帝の母明子（良房女）であるということは伝承世界のネットワークの一端を垣間見せてくれる。

ともあれ都を囲繞するこれら愛宕、比叡、鞍馬の山々は、都に生きる人々にとって日々仰ぎみる山々であるが、一方でそれらは神社仏閣の立ち並ぶ神仏のいます聖地であり崇敬の対象であると同時に、他方悪霊悪鬼の跳梁する魔縁の地でもあるという両義性を有する地である。

とりわけその中でも愛宕山は火に深い関わりをもっている。たとえば『諸社一覧』[28]によれば、

祭ル神　二座　伊弉並尊　火産霊尊

松尾神書云軻遇突智者火神也故此神掌二火災一祭二之平安城乾隅愛宕山二而除二火災一者也

とあり、また『神祇拾遺』[29]にも、

愛宕権現

端御前　軻遇槌命也。

奥御前　伊舎那美尊。

とある。祭神カグツチは周知の通り記紀神話においてイザナミが最後に産んだ火神であり、そのためにイザナミは根国に隠れたのであったが、今日でもなお愛宕山は火除け、火伏せの神として信仰を集めているし、民俗事例としても関東、東北、中国、四国での愛宕講が火除けと疫病除けを祈る行事であることが報告されている。[30]

このようにして安元三年の大火が太郎焼亡と命名される深層が浮かびあがってくる。火災は見えざる力、隠された神意の発動である。それを解読するコードが都の地勢の中に徴しづけられている。それ

が愛宕山である。そして神意を帯びて都と山を往還する見えざる力がある。それが天狗である。こうした伝承世界の約束事の中から、安元三年の大火がくっきりとした像を結んで人々の記憶のうちにまた新しい伝承の層を積み重ねていくのである。付け加えるならば、安元三年の大火は樋口富小路に出火して「戊亥のかたへすじかへに（平家物語）」燃え広がっていった。また治承二年の大火は七条北東洞院に出火して「八条坊門朱雀大路（清獬眼抄）」まで延焼した。つまり太郎焼亡は北西の方角を指して炎上し、次郎焼亡は西南の方角へ炎が南下していった。北西と西南、そのそれぞれの延長線上に位置するのが、ほかならぬ太郎坊天狗の住む愛宕山であり次郎坊天狗の住む比叡山なのである。

ここでもう一度平家物語などがいう日吉神火に立ち戻ってみるならば、大火を「山王所為」とするような発想が単に物語の文脈上の附会ではないことが明らかになったであろう。「京中風聞」「世人称」とは、文字通り京中世人の共通して了解し記憶するところの伝承のありようを示しているといえるだろう。

4

最後に安元三年大火と『玉葉』記事との関わりについてみておきたい。刻々と伝わる情報を記す『玉葉』の記事は他の資料にはない一種の臨場感があるが、「焼亡所々」として「大極殿已下、八省院」のことを記し「公卿家」として「公卿十四人」の邸宅を挙げる姿勢は『百錬抄』『清獬眼抄』などに共通するものであることは前節で既に指摘した。『玉葉』で特徴的なのはこの大火に対する兼実の次のような把握の仕方である。

> 未曽有、未曽有、凡余焔之為レ体非二直事一歟、火災盗賊、大衆兵乱、上下騒動、緇素奔走、誠是乱世之至也、非二人力之所レ及、天変雖二頻呈一、法令敢不レ改、致レ殃招レ禍、其不レ然哉、熒惑入二太微一、渉レ旬渉レ月、熒惑是火精也、太微即宮城也、華洛成二灰燼一、変異之験、可レ謂二掲焉一歟

大火が「未曽有」の事件であり、「大衆兵乱、上下騒動」する「乱世」の象徴であるとするならば、『玉葉』が示そうとする時代相は平家物語のいう「今は世末になって」という認識と重なりをみせる。仏教史観による末法意識の深刻化と、平安朝末期の政治的社会的混乱に裏打ちされた末代意識の深まりとは、当時にあって広く共有された時代認識、現実認識であったから、大火に対するこのような把握は平家物語や『玉葉』にのみ固有なものであったわけではない。むしろここで注目したいのは引用の「天変雖頻呈」以下の部分、とりわけ「熒惑入太微」以降の箇所である。熒惑とは火星の異名[31]であり、太微とは「獅子座の西端近くの十星をまとめた星垣の名称[32]」

であるが、その熒惑が太微に入ること旬に渉り月に渉るというのである。この記述はいったい何を意味しているのであろうか。『史記』[33]天官書には「熒惑為勃乱残賊疾喪饑兵」とある。つまり熒惑（火星）は「その国に兵乱が起こること、賊の害の起こること、疫病、人の死、饑饉、兵戦を支配する」[34]星なのである。また『淮南子』[35]天文訓にも「（熒惑）司二無道之国一、為レ乱為レ賊、為レ疾為レ喪、為レ饑為レ兵」とあって兵乱や疫病を司る星として熒惑星が想念されてきたことがわかる。

しかも熒惑が太微に入ることは大きな変異や事件を招く兆しとして考えられていたのである。

月五星順二入軌道一。司二其出レ所守。天子所レ誅也。其逆入者不二軌道一以レ所レ犯命レ之中座成レ形。皆群下従レ謀也。金火尤甚。其（熒惑）入守二犯太微軒轅営室一主命悪レ之。

このいうところは「月と五星が軌道に沿うて正しく西から太微の座に」はいらず「逆にはいり軌道に沿わない時」は「天子を犯そうとしているのであるから、天子は誅伐することを命ずる。天子の座を犯す形が現われるというのは、すべて群臣が天子に対して、陰謀をたくらむしるしである。金星・火星の時は、特に大事である」。それゆえに熒惑が太微に入って動かないのは「天子諸侯が忌むこと」なのであった。『玉葉』のいう「熒惑入太微、渉旬渉月」とは文字通りそのような熒惑が動かない状態のことをいっているのである。

もとより『玉葉』にはこの日に限らず陰陽道に基づく解釈や指摘が頻出するが、兼実の陰陽道に対する傾倒はなみなみのものではない。というよりも兼実個人だけでなく、たとえば保元の乱で自滅した兼実の叔父頼長なども含めて平安末期の貴族知識人層にあっては陰陽道は変転してとどまるところをしらぬ現実を把握するための重要な拠り所の一つであったといえよう。

『玉葉』によれば熒惑が太微に入ったのは安元三年の大火時だけではなかった。

泰親朝臣語二天変事等一、熒惑逆入二太微一、平治之外無二此変一、天下大事出来歟云々、可レ恐云々

（安元三年二月十日条）

いうまでもなく「平治」とは平治乱をさすが、ここでの泰親の予言は二ケ月後に未曽有の大火として的中したのであった。泰親は既に前年から「熒惑入太微之変」（『玉葉』安元二年十月二十五日条）を指摘しており、兼実が大火の当日に「熒惑入太微」ことを大火と関連づけて記したのはこうした伏線によるものなのである。

また熒惑が歳星を犯した記事もある。

大外記頼業来、召二簾前一、談二雑事一、其次語云、自二去正月

十四日至レ晦、七筒日之間、火星守二犯歳星一、是治承三年逆乱之時変也

（養和二年二月十七日条）

「治承三年逆乱」とは清盛による法皇幽閉、大臣流罪などのいわゆる治承三年のクーデターである。

平家物語にはそのような陰陽道的傾向としての災異思想が見え隠れする。それは仏教的な因果観や無常観のようにストレートに物語の縦糸を成しているわけではない。むしろ逆に見え隠れすることが物語の底流として伏在していることを示唆しているのではないだろうか。時としてそれは明確な予兆思想として物語の表層に顕在化する。その一つの例が蚩尤旗の出現である。

同正月七日、彗星東方にいづ。蚩尤気とも申。十八日光をます。

（赦文）

平家物語はこの蚩尤旗の出現とこれに前後する中宮徳子の御産について何ら脈絡づけを行なっていない。[36] したがって表面上は天文記事と御産記事が並列されているようにみえる。しかし並列は解読を求めている。つまり一見無関係にみえる両者の間の関係づけが求められているのである。蚩尤旗が「兵乱の前兆を示す妖星」[37]であるとすれば、中宮の御産は不吉なものであり、祝福されるべき皇位継承者としての第一皇子の誕生はその将来に不吉な影を宿すことになるのである。

もはや陰陽道は宮廷社会の中で陰陽寮に属する官人たちの独占するところではなくなっていった。そこに陰陽道の大衆化、いわば底辺の拡大がある。院政期における武士の社会的進出は武士層にもそして庶民層にも陰陽道の浸透をもたらしていった。そのことはたとえば先に触れた盛衰記の「盲ト」からもうかがえるし、また次の盛衰記の記事も同様である。

（娘中宮徳子の難産にいてもたってもいられない）二位殿心苦しく思ひ給ひて、一条堀川戻橋にて、橋より東の爪に車を立てさせ給ひて、橋占をぞ問ひ給ふ。十四五ばかりの禿なる童部の十二人、西より東へ向ひて走りけるが、手を叩き同音に

榻（しじ）は何榻、国王の榻。八重の塩路の波の寄せ榻。

と四五遍うたひて橋を渡り、東を指して飛ぶが如くして失せにけり。二位殿帰り給ひて、せうと平大納言時忠卿にかくと仰せられければ、「波のよせ榻こそ心得候はねども、国王の榻と侍れば、皇子にておはしまし候ふべし。目出たき御占にこそ候へ」とぞ合せたる。八歳にて壇の浦の海に沈み給ひてこそ、八重の塩路の波の寄せ榻も思ひ知られけれ。

（中宮御産事）

一条戻橋は陰陽師の世界で神格化されている安倍晴明にまつわる伝承の地であり、また民間の陰陽師の多くたむろする地でもあった。また童部の歌は予兆を含んだ童謡（わらうた）、陰陽道でいうところの詩妖に他ならないことが村山修一氏[38]によって既に指摘されている。

ところで兼実に陰陽道の知識をしばしば提供している安倍泰親はその晴明の五代の末裔であるが平家物語にも幾度か登場する。覚一本の場合は五回であるが、そのいずれも物語に前兆や予兆を仕掛ける役割を担っている。しかもそれらはすべて不吉な凶事の予兆なのである。[39]実在の泰親は実際兼実とかなりの親交があった。『玉葉』には仁安元年一月三日から建久二年十二月五日に至るまで都合六十六回泰親の名を見出すことができる。[40]もちろんこの中には、たとえば泰親の家が火災にあった（治承四年二月十日条）というような内容の記事も含まれているが、泰親が足繁く兼実邸に参向し、天変を中心とした陰陽道の知識を伝受していたことは確かな事実である。だからといってもちろん泰親―兼実―平家物語の間に安易に相関関係を求めようというのではない。むしろ平家物語における泰親はその「実像」において物語に姿を現わしているのではなく、予兆を仕掛ける役割において存在の意味を有しているというべきであろう。家祖晴明がさまざまな伝承によって彩どられた人物であるのと同様に、泰親もまた伝承世界における「さすの御子」を体現する者の一人なのであった。

このように考えてくると、もう一度最初の『玉葉』記事「熒惑入太微」に立ち戻らねばならない。熒惑が太微を犯すことの意味は、まさしく「群臣たちが天子に対して陰謀をたくらむ」点にあった。そのことを平家物語の文脈と重ね合せてみると、この安元三年の大火・内裏炎上は、鵜河白山事件の只中にあって表面上は山門と院との厳しい対立相を軸に展開していくのであるが、その見えないところで成親などをはじめとする院の近臣たちの謀略がたくらまれているという進行が隠されていることが見透かされてくる。そのような意味で、内裏炎上は、平家物語自身がいうように「世末になって国の力も衰え」ていく現実相を表面に押し立てながらも、その深層において新たな事態の進展、言い換えれば都市にとって新たな災厄の招来が秘されているといえるだろう。都市における災厄とは地震、疫病、火災といった天災、人災ばかりではない。都が宮都としての秩序を失うこと、それは正しからざる皇位の継承であったり、陰謀による為政者の失脚であったり、後宮の乱脈であったり、僧侶らの濫悪であったりさまざまであるが、それらそのものが都にとっての災禍であり、しかもそれがまた新たな災いを生ずる因となり種子となっていくのである。

陰陽道の災異思想は、それらを解釈するコードを、平家物語を含

めて都市の伝承に提供しているといえるだろう。

おわりに

以上、平家物語の内裏炎上をめぐって、その深層に都市、都市に生きる人々、そして彼らに担われた伝承という視点から、大極殿焼亡のもつ意味、日吉神火を太郎焼亡と命名する伝承の重層性、そして陰陽道と平家物語の関わりについて考察してきた。都市と伝承と平家物語、それぞれの接点をどれほど模索しえたかはこころもとないが、可能態としての新しい伝承論の糸口は見出せたかもしれない。

注

① このような問題意識の一端を、平成四年度説話伝承学会大会（四月二十八日、大谷大学）で「平家物語生成の一断面―都市民の語り―」と題して報告した。その内容については近々成稿の予定。

② 覚一本は日本古典文学大系（岩波書店）。以下特に断らない限り平家物語の引用はこれによる。

③ 佐々木八郎『平家物語評講上』一四七頁、明治書院、一九七四年九月。

④ 冨倉徳次郎『平家物語全注釈上』二二一頁、角川書店、一九七六年六月。

⑤ 早川厚一・佐伯真一・生形貴重『四部合戦状平家物語評釈（三）』『名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）巻二一・二号、一九八五年。なお引用箇所は佐伯氏の担当。

⑥ 三木紀人「転形期の文学精神」『解釈と鑑賞講座　日本文学・平家物語下』、至文堂、一九七八年五月。

⑦ 『群書類従』七輯、一九八三年二月。

⑧ 『新訂増補国史大系』11、吉川弘文館、一九六五年八月。

⑨ 『新訂増補国史大系』19、吉川弘文館、一九六五年一二月。

⑩ 簗瀬一雄編『校註　鴨長明全集』、風間書房、一九八〇年八月。なお引用は大福光寺本によった。

⑪ 『玉葉』一・二、国書刊行会、一九〇七年二月。

⑫ 『国史大辞典』8、九一三頁、吉川弘文館、一九八七年九月。

⑬ 歴史学ではこのような分離の仕方について近年異論が出されているが、ここでは錯綜を避けるため立ち入らない。たとえば古瀬奈津子「政務と儀式」（笹山晴生編『古代を考える　平安の都』吉川弘文館、一九九一年）参照。

⑭ 「宮城図」は、陽明文庫主事名和修氏の御好意により、同志社大学の廣川研究室が撮影した写真版による。記して謝したい。

⑮ ⑫に同じ、七三五頁。

⑯ 廣川勝美『深層の天皇―源氏物語の古京―』一九四頁、人文書院、一九九〇年一二月。

⑰ ⑯に同じ、一五頁。

⑱ 新日本古典文学大系『平家物語上』山下宏明解説四二〇～四二一頁、岩波書店、一九九一年六月。

⑲ 『新訂増補史籍集覧』一、臨川書店、一九六七年六月。

⑳ 『群書類従』三輯、一九八三年八月。

㉑ 井上満郎『京都　躍動する古代』二一一頁、ミネルヴァ書房、一九九〇年一月。なお同氏の『京都　よみがえる古代』（ミネルヴァ書房、一九九一年四月）にも同じ指摘がある。

㉒ ⑯に同じ、八一頁。

㉓ 水原一考定『新定源平盛衰記』一、新人物往来社、一九八八年八月。

以下盛衰記からの引用はすべてこれによる。

㉔『居行子』。なお引用は『広文庫六』による（六六四頁）、一九二二年一月。

㉕『残太平記』。なお引用は『広文庫九』による（六七四頁）、同右。

㉖『参考源平盛衰記』上、三七六～三七七頁、臨川書店、一九八二年七月。

㉗『京童』『新修京都叢書1、七五～七六頁、臨川書店、一九六七年一〇月。

㉘『続々群書類従』一、国書刊行会、一九〇六年五月。

㉙『続群書類従』三輯上、一九二四年二月。

㉚桜井徳太郎編『民間信仰辞典』九頁、東京堂出版、一九八一年一〇月。

㉛諸橋轍次『大漢漢辞典』七、五〇三頁、大修館書店、一九九〇年四月。

㉜村山修一『陰陽道基礎史料集成』、四二〇頁、東京美術、一九八七年一一月。以下、陰陽道に関する資料や理解については、本書と『日本陰陽道史話』（大阪書籍、一九八七年二月）と『日本陰陽道史総説』（塙書房、一九八一年四月）の村山氏の三著に負うところが大である。記して謝したい。

㉝漢文叢書『史記』、有朋堂、一九二〇年一一月。以下史記からの引用はこれによる。

㉞野口定男他訳『史記』上、平凡社、一九九一年一二月。以下史記の訳文はこれによる。

㉟新釈漢文大系54『淮南子』、明治書院、一九七九年八月。以下淮南子の引用とその訳文はこれによる。

㊱盛衰記などでは意味づけられている。

㊲㉜に同じ、四一六頁。

㊳㉜参照。

㊴長門本にはそうでないケースも一例ある。

㊵多賀宗隼『玉葉索引』、吉川弘文館、一九七四年一一月。